論題「二人称代名詞の混用について」

(Über das Personalpronomen der zweiten Person)

野　島　利　彰

1

ドイツ語の二人称代名語は古典語同様もともと du のみしか存在せず，いわゆる敬称二人称は後世の産物（といってもかなり古く，9世紀に既にその使用が見られる）である。敬称の Ihr の出発点は君侯的尊厳の wir にある。すなわち，ローマ帝政時代に皇帝が自己を指し示す人称代名詞として wir に当る語を用い，それがフランク王国時代の王に引き継がれ，彼等も王の威厳を表わすために自称詞 wir を用いた。その結果王以外の身分の者は wir の裏返しである二人称複数 Ihr を王の対称詞とした。時代が下ると共に Ihr の使用範囲は拡大し，一般の貴族，上流階級にまで広まり，次第にもとの高貴さを失ない，単なる敬称に変化してしまった。(15 世紀)。

一方，高貴な人物を直接に人称代名詞で指示することは，相手への畏敬の念から避けられるようになり，その代用として人称代名詞の格または所有形容詞性質を表わす名詞（例えば Euer Hoheit, Eure Hochwürden）が 15,6 世紀に使われた。主語が例えば Hoheit のような名詞に変ったことは動詞に影響し，動詞変化は三人称単数形，尊号名詞が複数の時は三人称複数形となった。

また尊号を付与し得ない身分の人々に対しては der Herr, die Frau などが二人称代名詞の代りとされた。例えばグリンメルスハウゼンの「阿呆物語」(1668 年）に次のような会語が表われる。

1. Sobald er meinen Alten sahe, sagte er: "*Der Herr* sei gebetten, mir

zu verzeihen, daß ich die Frechheit brauche, ein Wort mit ihm zu reden." "Wohl", antwort der Stallmeister, "was beliebt dann *dem Herrn*?" "Nichts anders" sagte der Leutenant, "als daß ich *den Herrn* bitten wollte, ob er sich ließe belieben, mir meine Nativität zu stellen?"

(Simplicissimus 第2巻 24 章)

この例で分るように der Herr は途中で繰り返しを避け，er に置き換えられている。この er は現代ドイツ語に直せばもちろん敬称の Sie に当る。このように der Herr, die Frau から敬称の Er, Sie（三人称単数）が作られ，16世紀以降それまでの敬称 Ihr に代って敬称の座を占めることになり，Ihr の方は次第に値打ちを下げ Er よりも下位に置かれてしまった。

また尊敬の度合がより強いという意味で使用された複数形の尊号（Euer Gnaden, Eure Hochwürden 等）は，その使用頻度が高まるにつれ，その代名詞である三人称複数の sie に代えられ，男女両性を区別する必要もない便利さもあって，新しい敬称として敬語の世界に登場した（17世紀末)。sie すなわち Sie は以後 18 世紀の文学隆盛の波に乗って広がり，Er をその王座から駆逐してしまった。この時代の各二人称代名詞を敬意の多少の順に並べると Sie, Er (Sie), Ihr, du となる。この他に最高位として代名詞ではないが Ihre Durchlaucht 等が存在した。

しかし最近まで格調の高い戯曲ほど Sie の代りに Ihr を用いる傾向があったため，言葉の世界で Ihr が再び敬意を獲得し，先程の順位を変え，Er よりも上と見なされるようになった。

以上の二人称代名詞の歴史的変遷を踏まえた上で，戯曲中の二人称代名詞について述べて見たい。

2

グリルパルツァの戯曲「オットカール王の栄華と最期」の第二幕。新王妃クニグンデが馬上槍試合の優勝者ツァーヴィシュに手ずから褒賞を与えようとした時，以前から王妃に恋心を抱いていた彼は，かつて彼女に贈った恋文の詩の

一節を小声で口ずさむ。王をも含めた衆人環視の中でのこの大胆な振舞い。王妃は驚きの余り，彼に褒美として授けようとしていた栄誉の印の飾緒を思わず取り落してしまう。慌てて王妃が飾り緒を拾い上げようと身を屈めたその一瞬の隙を狙って，ツァーヴィシュは再び大胆にも王妃の腕に飾られたリボンを，恋の記念にしようと，すばやく盗み取ってしまう。王妃クニグンデは狼狽して王に向って言う。

2. KUNIGUNDE : Ha, mein Gemahl ! (Ottokar wendet sich nach ihr) ZAWISCH (der aufgestanden ist und sich gegen die Mitte zurückzieht) : Die Königin, mein König !

OTTOKAR : Was ist ? Was willst *du*, Kunigunde ?

(Pause, während welcher die Königin Zawisch ansieht, der ruhig vor sich hinblickend dasteht. Sie blickt noch einmal hin, dann

KUNIGUNDE : Geht Ihr noch heute nach Ribnik auf die Jagd ?

OTTOKAR : Wie kommt *Ihr* auf die Frage ? Heute, ja !/Auch bist *du* ganz verstört. Was war denn hier ?/Das Dankerteilen macht *dir* so viel Müh,/Daß ich in Zukunft *dir*'s ersparen werde !

ここでオットカールの台詞に現われた du と Ihr とが共に同一人物，つまり王妃を指していることは疑いがない。とすれば二人称の点では同じであっても，意味の異った代名詞を同一人物を示すのに用いていることになる。

我々は一般に du や Sie は一定の人間関係の中で用いられ，その使用法は固定したものと考えている。例えば du は現代ドイツ語では親子，夫婦，親しい友人等の間で互いの呼称とされている。この人間関係は普通は変動のないものであるから，それに則って択ばれた du もまた変動しないのが普通である。それ故，du から Sie に急に代名詞を変えることなどはほとんど考えることが出来ない。

我々外国人は普通は敬称から習い始めるが，ドイツ人は反対の方向を取る。彼らには生まれた時すでにまず du の世界が存在し，やがて成長するに従って Sie の世界が現われて来る。Sie と対立することで du は言わば着なれた衣服の感触を持ち始め，寛ぎの意味を付与される。従って Sie から du への変更

は Sie の持つ冷い世界から再び家族的な世界へ移ることである。そして du を用いる世界こそが人間の真の生活基盤であれば，du への変更は極めて容易に起り得ることであろう。しかしこの場合でも普通は一種の手続き，例えば

3. Schweizer (gibt ihm die Hand, mit Wärme): Lieber Junge! wir duzen einander. (Räuber 3,2)

のように言うことが必要であり，唐突に du を用いることはできないであろう。また手続きを経て du に移行したならば，その後は du のみを使用するのが原則であろう。勝手に Sie と du を混用することは，両者が依拠する人間関係を混乱させ，言語活動の円滑さを阻害する恐れがあるように思える。

しかし実際には敬称と親称の混用は例2のように起り得ることであり，戯曲中にかなりの割合で出現している。そこから更に現実の会話でも同じ事が起ると十分に推定できる。

ところで，ここで言う混用とは二人称代名詞の無秩序な使用を意味してはいない。前で述べたように，代名詞の基盤となる人間関係は固定的であるから，代名詞もまず一定のもののみの使用が暗黙の内に約束されてあり，ただ時に応じ場面に応じて，一時的にその約束を逸脱した使い方が見られるという意味である。

また混用は必ずしも他の二人称から du への変更だけではない。Sie から Er, Ihr から Er への移行例もある。ではこういった混用がどのような場面で起るのかを詳しく見て行こう。

3

まず先程の例2のオットカールの台詞の du はどうであろうか。オットカール王とクニグンデは夫婦であるが通常は共に Ihr を用いている（以下通常互いにどのように呼び合っているかを例えば W (Er) ↔ (Sie) Pのように図示することとする。W は P に Er で呼ばれ，P を Sie で呼ぶの意味である。三人称単数の sie を大書した Sie は sie で表わす)。夫婦間の敬称は現代では一見奇異な感がするが，「エミリア・ガロッティー」「ヴァレンシュタイン」等の

作品にも見い出せる。一人一人がもともと Ihr で呼ばれるような貴族的身分の夫婦の間では敬称を用いることが普通であったのだろう。逆に「たくらみと恋」の市民ミラー夫妻は常に du で呼び合っている。

ところでオットカールは他の場面でクニグンデに向ってやは du りでこう言っている。

4. OTTOKAR: …Es will der Sieger des Turnieres nur/Aus *deiner* Hand den Preis empfangen!/Nu, Kunthe, wie geht's? (er will sie am Kinne fassen, sie tritt zurück.

ここでオットカールの用いた du は，王が妃の顎を掴えようとする動作あるいは Kunthe という愛称から判断して，一つの愛情の表現と見ることが出来る。このように愛情の表現として du を観点として，もう一度例2に戻ると，王の台詞 "Auch bist du ganz verstört." の du も妃に対する王の優しい気遣い，つまり愛情の表現のために用いられたと考えられる。

むしろここで問題となるのは，王の台詞の中で他の du に囲まれて飛地のようになっている Ihr の方である。この王の言葉は王妃の言葉 "Geht Ihr noch heute nach Ribnik auf die Jagd?" に応ずるものである。王妃は先刻の少々取り乱した言葉を羞しく思い，興奮した心を気取られぬ様，意味のない事を平静を粧って極めて普通の調子で言ったに違いない。また貴族の夫婦間で敬称による会話が日常的であるならば，オットカールの Ihr による応答の仕方もまた日常的調子であるだろう。それ故，ここでの Ihr は彼の言葉が感情的色合いを含んでいないこと，つまり非難めいた口調ではないことを意味している。そしてそれに続く台詞は，王妃の問が妙であることに気付いた王が日常的調子を越え，私的に（場面は今諸侯が居合わせる表彰式である）相手を労わりつつ，親密な雰囲気の中で行なわれている。

レッシング「ミンナ・フォン・バルンヘルム」第2幕2場。テルハイム (T) は零落した身を恥じ，許嫁のミンナ嬢 (M) の前から姿を隠していたが，ついに見つけられ，彼女と婚約したかつての自分と落ちぶれた現在の自分と違うことを必死に説明し，ミンナの愛を拒もうとする。T (Sie) ↔ (Sie) M

5. TELLHEIM: …Dieser Tellheim bin ich ebensowenig, als ich mein

Vater bin. Beide sind gewesen. —Ich bin Tellheim, der Verabschiedete, der an seiner Ehre Gekränkte, der Krüppel, der Bettler. —Jenem, mein Fräulein, versprachen Sie sich; wollen *Sie* diesem Wort halten? —

DAS FRÄULEIN: Das klingt sehr tragisch! —Doch, mein Herr, bis ich jenen wiedrfinde—in die Tellheims bin ich nun einmal vernarret—, dieser wird mir schon aus der Not helfen müssen.—*Deine* Hand, lieber Bettler! (Indem sie ihn bei der Hand ergreift.)

TELLHEIM (der die andere Hand mit dem Hute vor das Gesicht schlägt und sich von ihr abwendet): Das ist zu viel! —Wo bin ich? —Lassen Sie mich, Fräulein! Ihre Güte foltert mich! —Lassen Sie mich.

DAS FRÄULEIN: Was ist *Ihnen*? Wo wollen *Sie* hin?

ミンナ嬢の台詞 deine Hand, lieber Bettler! は幾分諧謔を含んでいるにせよ，親愛さの表現であることは異論がないと思う。殊にミンナがテルハイムの手を掴もうとする動作は，相手の体に触れることで親愛を示す西欧の身振り言語の一つであり，そこからも簡単にこの場面の状況を説明できる。

ところで今のミンナ嬢の台詞，例2のオットカールの台詞（Auch bist…）はどんな風に発声されるであろうか。どうしても直前の言葉を言い終り，少し間を置く必要が感ぜられる。そうしなければ du を含む台詞に移ることが出来ない。つまり前後の文章が連続していないからである。話し手の気持がここで急に変化し，表現された言葉の意味以外に聞き手に何か別なことを伝えようとしている。この伝達内容が親称の du —語の中に込められている。

4

オットカール王が王妃マルガレータを離縁し，新たにハンガリー王の娘クニグンデを娶ることとなった。予て王妃の跡を狙っていたベネシュの娘ベルタは，それをかつて自分が袖にしたザイフリートから聞き，悲嘆の声を上げて床に突っ伏してしまう。

6. BENESCH (zu Seyfried): Wer sagt's *Euch*? —Her zu mir!

MILOTA (auf sie zugehend) : Kommt, Nichte, Kommt ! hier ist kein Platz für Euch !

BERTA : O Seyfried, schütze mich !

SEYFRIED : Mit Gunst, Herr Milota !/Wenn Ihr es wagt, die Hand an sie zu legen,/So stoß ich Euch die Partisan in Lcib. (Die Hallbarte gesenkt.)

BENESCH : Und wenn ich selbst— !

SEYFRIED : Mir gleich !

BENESCH : Verweigerst *du* dem Vater/Sein Kind !

SEYFRIED : O hättet Ihr sie doch verweigert, /Sie läge jetzt nicht stöhned vor uns da/Daß mir das Herz im Innern um sich wendet !

ベネシュはザイフリートより年長であるが，共にオットカールに仕える者である。B (Ihr) ↔ (Ihr)S。今ザイフリートは武器を構え，明らかにベネシュと渡り合う用意があることを示したので，ベネシュはもはや敬称を用いず，激しい口調で呼称を du に変えている。これは言わば喧嘩腰の du である。

この du の持つ喧嘩の調子がさらに増幅されると憎悪になる。オットカールは村の鐘撞堂で発見した女を，ツァヴィシュと駈け落ちしたクニングンデの腰元と感違いし，かっとなって言う。

7. OTTOKAR : Fort, Kupplerin ! Wo hast *du* deine kunden ?

しかし後でこの女が前王妃マルガレーテの腰元であり，しかもつい昨日病死した前王妃の遺骸を守っていたと聞き語調を和らげて言う。

8. OTTOKAR : Wo aber wollt *Ihr* hin ?

この二つの王の言葉を比較すれば，前者の du 方のに憎しみが込められていることが理解できる。

またオットカール王は老騎士メーレンベルク（本来マルガレータ妃の臣下）を裏切り者と思い込み憎悪を以って言う。

9. OTTOKAR : …(Gegen Merenberg) Mit dem in Turm ! Was schützte vor Verrat,/Als die Bestrafung früherer Verräter ? /wer bauen will, der reutet seinen Grund,/Drum fort, *du* böses Schlingkraut, gift'ge Ranke!

しかしこれより先の場面で，メーレンベルクがマルガレータ妃を庇うためちょっと出過ぎた行ないをすると，すぐに王はこう言う。

10. OTTOKAR: Wer rief *Euch*, Herr?/Wer hieß *Euch* weichen dort von Eurem Platz?/*Ihr* habt einmal unnütz schon gemacht!/Dorthin!

この場面は語調としてはむしろ du を用いたい所であろうが，まだ罪人でもない人間を諸侯の前で du を以って叱責することは，余りにも明らさまの憎悪として憚られたのであろう。オットカールの生きた時代（13世紀）ではなくもっと後の時代には，敬称から親称（むしろここでは蔑称と言うべきであろう）に移る途中にもう一段階を挾むことができた。それによって敬称から直接に蔑視的態度に陥ることを防止した。

11. WALTER: Was geht *Ihm* die Frau Marte an, Herr Richter?

(Der zerbrochene Krug 860)

司法顧問官ヴァルターと村長兼裁判長アダムとは互いに Ihr で呼び合っている。W (Ihr) ↔ (Ihr) A。この場面は顧問官がアダムの裁判の進め方に文句をつけた処である。顧問官は急にアダムに Er を用いている。もちろん Ihr から一段階下げて Er にしたのであるから，表現は強くなっているはずである。しかし du を用いた時ほどではない。また du を用いることはそれだけ顧問官自身が興奮し，激高していることを意味してしまい，彼の威厳を損う。その上，相手も一応身分のある人間であるから，du では相手の名誉を傷つけてしまう。従って，ある程度の憤慨を示すことが出来，しかも両者の権威に傷がつかない言い方として Er は非常に相応しいことになる。ただしこの Er はもはや憎悪あるいは喧嘩腰の du と違い，単に非難の口振りを意味するだけである。

12. DER PRINZ: Nein, sag ich, das ist nicht, das kann nicht sein.—*Sie* irren sich in dem Namen.—Das Geschlecht der Galotti ist groß.—Eine Galotti kann es sein; aber nicht Emilia Galotti; nicht Emilia!

MARINELLI: Emilia—Emilia Galotti!

DER PRINZ: So gibt es noch eine, die beide Namen führt.—*Sie* sagten ohnedem, eine gewisse Emilia Galotti—eine gewisse. Von der rechten könnte nur ein Narr so sprechen.—

MARINELLI: Sie sind außer sich, gnädiger Herr.—Kennen sie denn diese Emilia?

DER PRINZ: Ich habe zu fragen, Marinelli, nicht *Er*. Emilia Galotti? Die Tochter des Obersten Galotti, bei Sabionetta?

MARINELLI: Eben die.

DER PRINZ: Die hier in Guastalla mit ihrer Mutter wohnet?

MARINELLI: Eben die.

DER PRINZ: Unfern der Kirche Aller-Heiligen?

MARINELLI: Eben die.

DER PRINZ: Mit einem Worte-(indem er nach dem Porträt springt und es dem Marinelli in die Hand gibt) Da! -Diese? Diese Emilia Galotti? -Sprich *dein* verdammtes "Eben die" noch einmal und stoß mir den Dolch ins Herz!

この例では公爵（Prinz）は侍従のマリネリに三度呼称を変え（Sie, Er, du）て呼び掛けている。この理由は途中マリネリの台詞（Sie sind außer sich）で言われているように，公爵が我を忘れて憤激し，その我を忘れる程度が高まるにつれて呼称が変化したものである。また，最後の du は，Er に対する命令には接続法（言わゆる要求話法）を使用しなければならず，しかしそれでは命令形の持つ鋭さが消えてしまうので，敢えて du を用いたとも考えられる。

このように，怒ることは一般に相手との社会的関係を忘れてしまい，敬称を落しがちである。

13. OTTOKAR: Verdammt sei dieser Brief! /Willst *du* mit Briefen mich und Worten meistern? (S. 379)

これはオットカールと皇帝とが抗争状態にある時，メーレンベルクの釈放を再三再四要求する皇帝の伝令官に対し，王が怒って言う場面である。始めは王は伝令官に一応の敬意を表し Ihr で話していたのであるが，皇帝の書面を振りかざし執拗に捕虜の釈放を求める伝令官の態度につい苛立って，du を用いた。が，気持が落ち着くと再び Ihr で話している。

14. OTTOKAR: *Euch*, Herold, halt ich nun nicht länger mehr! /Sagt

Eurem Herrn, was *Ihr* mit angesehn ! (S. 381)

また例2の後，自室に戻ってしまった王妃クニグンデを王が従者に呼びにやらせる。

15. OTTOKAR : *Ihr* aber geht zu miner Frau und *sagt* ihr :/Nicht stören möge sie der Gäste Frohsinn/Durch längeres Entbehren unser Wirtin !

従者は戻って来て報告する。

16. DIENER (kommt zurück) : Die Königin ist unpaß.
OTTOKAR : Ei, derlei Krankheit ist nicht schwer zu heilen ! / *Geh*. noch einmal und bitte sie zu kommen.

二度目の命令には du が使われている。これも苛立ちの表現と解せる。ただし，du の命令形の方が強い命令であると一般化することはできない。

17. OTTOKAR : …Mein Freund, tu mir die Lieb und *Geh* nach ihr !

ここでは従者に向って mein Freund と呼び掛け，相手を友人と見なした以上，当然命令法も du に対するものとなり，例16とは逆に親しさを表わしている。

5

ある人間が親称で呼ばれているか，あるいは敬称で呼ばれているかと言っても，実際には複数の人間が存在する訳ではなく，何で呼ばれようと人間は一人である。二人の別のタイプの人間を存在せしめているのは話し手の考え方，つまり話者と聞き手との関係をどう捉えるかである。もし自分と他者との関係を尊敬の関係と捉えるならば，両者の間に敬意が介在しなければその関係が成り立たないと見なすことであり，具体的に相手に敬意を表すことが必要となってくる。

こうした尊敬の捉え方はただ頭の中にあり，相手に伝達するにはまず視覚化することである。例えば相手に接近しないことで距離的に表現する，跪くことで空間的に高低を出す，相手を直視しないことで自分を全く無防備の状態に置くことなどである。

相手に敬意を伝える次の手段は聴覚化，つまり言葉を通じてである。古代で

は神や王の名を直接に表現することはタブーであるが，名を口に出さないことは，ちょうど相手を見ないことと同じであり，言葉による敬意の表わし方の一つと考えられる。表現する内容の直接性を出来る限り避けるために，色々な手段を用いて迂遠な言い方をすることや，言葉を普通語と尊敬語とに区別して用いることもその一つである。そしてこのような様々の敬意の表現法が敬語法という一つの体系を形成している。つまり敬語とは話者と聞き手との関係に介在する敬意を聴覚化したものである。

敬語表現は敬意の介在を前提しなければならず，敬意そのものは優越者・支配者等の上位者の優越性を積極的に認めることから生じているので，敬語表現には常に社会機構が反映されている。

現代英仏語の敬称二人称は言わばドイツ語の Ihr，つまり元来二人称複数の代名詞の段階のままであるが，ドイツ語ではそこをさらに通り越して現在の Sie に発展してしまっている。

敬称の座を Ihr, Er, Sie が争った時代（16 世紀～18 世紀）はまた神聖ローマ帝国が支配権を失い，王権が解体し，代って 300 余の領邦君主国家が乱立した時代でもあった。このような複雑極りない国家では身分関係も当然複雑となり，「阿呆物語」のジンプリツィスムスが称号解説書（Titelbuch こんな本が存在したこと自体が一つの驚きである）を手にし，その煩瑣な称号の山を「未だかつて見たこともない愚行だ」（第 1 巻 27 章）と評する程であった。この称号の山から生じて来たのが現代の Sie であるとすれば，J・グリムが Sie を「ドイツ語という衣服についた洗い落すことの出来ない汚点」と嘆じたのも首肯できる。

二人称の混用とは結局，敬語表現と親称表現の混用である。従って親称への変更とは，話し手と聞き手の間に存在した敬意を取り去ること，敬意の介在を必要と認めないことである。「必要と認めない」が一方では敬意の反対語の軽蔑や憎悪を意味し，他方では垣根を撤去すること，愛情・親密を意味する。どちらの場合も，そこには敬語にまつわる社会的な身分関係は存在しない。話し手も聞き手も一瞬地位身分を失なう。

童話の世界では王も農夫も，人も動物も，親も子も，皆互いに du で語り，

まるで身分関係は上下の差ではなく，単なる役割の分担でもあるかのようだ。またギリシャ的世界は，ギリシャ語に敬称二人称が存在しないこともあって，常に du でのみ描かれ，du は一種の理想郷的雰囲気を醸し出すのに役立てられている。グリルパルツァの作品で言えば「サッポー」「金毛羊皮」等がこの例である。

しかし実際には du は常に甘い夢を見させるものではなく，凄じい現実の一面を見せつけることもある。例えば

18. Der Polizist : Steh auf, du Schwein,

(Dürrenmatt "Der Besuchder alten Dame")

Schwein! と言うためには du でなければならない。一般に侮蔑を意味する語は du と結びついて現われる。例えば例9の du böses Schlingkraut, gift'ge Ranke! あるいは次の二例を比較参照して頂きたい。同じ人物の違う場面での会話である。

19. KUNIGUNDE : Hier bin ich selbst ! /Um Schutz zu flehen, komm ich in Euer Lager.

RUDOLF : Schutz, edle Frau, bei *Eures* Gatten Feind ?

20. KUNIGUNDE : Der König ist gefangen, wird gesagt.

RUDOLF : Hier, Wei b, hier liegt *dein* Mann ! R (Ihr) ↔ K (Ihr)

中世にあっては貴族の夫人は Frau であって Weib ではないことは，中世叙事詩等で明らかなことである。それ故 Weib と言われることはクニグンデにとって侮辱以外の何ものでもない。

敬語が相手との身分関係を把握した上で用いられているならば，ある程度話し手の側に心の余裕が必要なのではあるまいか。激怒した時の du をそう説明することも出来る。あるいは緊急の事態に直面した時は正に余裕の無い時である。例6のベルタの台詞 "O Seyfried, schütze mich!" は，両者の関係が B (Ihr) ↔ (Ihr) S であると知れば，危難に際した du だと認められる。毒を飲まされたと知ったルイーゼは

21. LUISE : Ferdinand, auch du ! Gift, Ferdinand ! Von *dir* ?

(Kabale und Liebe 5,7) L (du) ↔ (Sie, du) F

とそれまでの Sie を du に変える。

また相手を敬うことが相手を積極的に優越者と見なす態度であるとすれば，話し手は逆に敬語を用いることで，優越者が自分に保護を与えること，少くとも危害を加えないことを期待している。今までのを例見ても分るように，二人称の混用が行なえるのはほとんど全て上位者なのである。オットカール王，例6のベネシュ等。下位者は弱者であり，身の安全を保つためには常に強者に阿る必要がある。「壊れ甕」の村長アダムは自分を罷免する権限のある司法顧問官ヴァルターに，彼が Er で言ったからといって，Er で返すことは出来ない。呼称を三度変えた公爵に対し侍従は冷静に Sie を守り続ける。ザイフリードがもし年長者のベネシュ du をで呼んだならほんとうに一方が倒されていたかもしれない。侮蔑出来るのも上位者であり，siezen を止めて duzen しようと言えるのも精神的に上位者ではあるまいか。

しかし弱者にも上位者を du と言える時がある。第一にそれはもはや上位者の加える危害を恐れない自暴自棄的な態度である。

22. PRÄSIDENT: Verfluchter, von dir! Von dir, Satan! —Du, du gabst den Schlangenrat—Über dich die Verantwortung—Ich wasche die Hände.
WURM: Über mich? (Er fängt gräßlich an zu lachen.) Lustig! Lustig! So weiß ich doch nun auch, auf was Art sich die Teufel danken. —Über mich, dummer Bösewicht? War es mein Sohn? War ich *dein* Gebieter?

(Kabale und Liebe 5,7)

ルイーゼ及びフェルディナントの死について責任のなすり合いをする二人は“対等に” duzen している。両者の関係は P (Sie) ↔ (Er) W。ヴルムは宰相の秘書官で身分は下である。

第二に上位者が危害を加えないことが明白な場合である。敬意が危害を受ける可能性に基く下位者の態度であるなら，敬意を受ける側は少くとも現実の社会制度の中で機能し，善であれ悪であれ相手に働き掛ける力を持っていなければならない。死者は何も持たない。

23. OTTOKAR (bleibt an der Türe stehen): Margarete,/So bist *du* tot,

und hast mir nicht verziehn ? (S. 391) O (Ihr) ↔ (Ihr) M

また，目の前にいない人間は敬意を表しても聞く耳を持っていない。

24. WERNER: So wäre es ja wahr, was mir Just gesagt hat ? —(Gegen die Seite, wo der Wirt abgegangen.) *Dein* Glück, daß *du* gegangen bist ! (M. v. Barnhelm 3,5) W (Er, Sie) ↔ 亭 (Er)

同様に，眠っている人は聞く事も出来ないし，また現実に機能し得る“活動体”でもない。

24. AMALIA (sachte herbeischleichend): Leise, leise ! er schlummert. (Sie stellt sich vor den Schlafenden.) Wie schön, wie ehrwürdig ! —ehrwürdig, wie ein man die Heiligen malt—nein, ich kenn dir nicht zürnen ! Weißlockichtes Haupt, dir kann ich nicht zürnen ! Schlummere sanft, wache froh auf, ich allein will hingehen und leiden. (Räuber 2,2)

6

敬称の発生はすでに述べた通り，封建的身分関係に根ざすもので，敬語を用いることはこの身分関係を承認すること，ひいてはその上に立つ社会制度そのものを是認することに繋がる。従って今までの例とは逆に親称から敬称，あるいは低次の敬称から高次の敬称への変更は，二人の関係に敬意が必要なことを強調する意味を持つ。

25. ADAM: Wer seid Ihr ?

Frau Marthe: Wer - ?

ADAM: Ihr.

FRAU MARTHE: Wer ich - ?

ADAM: Wer Ihr seid ! /Wes Namens, Standes, Wohnorts, und so weiter.

FRAU MARTHE: Ich glaub, *Er* spaßt, Herr Richter.

ADAM: Spaßen, was ! / Ich sitz im Namen der Justiz, Frau Marthe,

/Und die Justiz muß wissen, wer Ihr seid.

LICHT (halblaut) : Laßt doch die sonderbare Frag—

FRAU MARTHE : *Ihr* guckt/ Mir alle Sonntag in die Fenster ja,/ Wenn *Ihr* aufs Vo rwerk geht ! (Der zerbrochene Krug 576)

村長兼裁判長のアダムが知り合いのマルテ夫人に人定尋問を行っている場面である。マルテ夫人はいつもの調子でアダムに Er で話し掛けているが，彼の方は威厳を示そうと Ihr で話をしている（この二人は普段は A (Er) ↔ (sie) M であることが他の箇処から推定できる)。裁判を行っているのだと強調されて初めて，マルテ夫人はアダムを Ihr で呼び始める。この Ihr は裁判長としてのアダムに向けられたものであり，裁判制度に付随する権威に向けられたものである。

このように敬称はその内容である敬意を媒介として社会制度に結びつき，敬称を用いることはその人間がその制度を通して関係し合っていることを意味する。二人称代名詞の混用は結局，du を基盤とする家族的，同族的な関係の上に立って発言しているのか，それとも，身分関係を基盤とする社会制度の中で発言しているのかの違いとなる。

○参　考　書（特に二人称代名詞の歴史について）

Hermann Paul: Deutsche Grammatik, Bd. 3, VEB Max Niemeyer Verlag, Halle (Saale), 1954.

Friedrich Blatz: Neuhochdeutsche Grammatik, 2. Bd., J. Lang's Verlagsbuchhandlung und Buchdruckerei Karlsruhe, 1896.（覆刻版三修社，1970 を使用）

George O. Curme: A Grammar of the German Language, Frederick Ungar Publishing Co., New York, 1952

○引　用　書

Grimmelshausen: Der abenteuerliche Simplicissimus, Philipp Reclam Jun., Stuttgart, 1969

Grillparzer: Grillparzers Werke, Aufbau—Verlag Berlin und Weimar 1967

Schiller: Schillers Werke, Aufbau—Varlag Berlin und Weimar 1971

Lessing: Lessings Werke, Aufbau—Verlag Berlin und Weimar 1971

Friedrich Dürrenmatt: Der Besuch der alten Dame, Verlag der Arche in Zürich 1956